

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 23 日現在

機関番号：43934

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25381334

研究課題名(和文) 発達障害児の地域育児支援-ピア・グループサポートの意義と専門家役割-

研究課題名(英文) Community child-rearing support for the children with developmental disabilities : Roles of peer-group-support and expert-supporter

研究代表者

幸 順子 (YUKI, JUNKO)

名古屋女子大学短期大学部・その他部局等・講師

研究者番号：20250251

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：発達障害児の保護者によるピア・グループサポート実践経過および参加者へのインタビュー調査結果の分析を通して、地域生活に根ざす相互支援が保護者のエンパワメントにどう貢献するか、また、仲間同士の相互支援に資する専門家役割を明確にした。

同じ立場の仲間と育児について話しあうことを通して、安心感や自己信頼感がもたらされ、育児観や自己意識にも変化が生じ、子どもとの関係のポジティブな変化を参加者が感じるようになったことが明らかになった。さらに、仲間に支えられた経験が相互支援の主体者としての意識を高めることが認められた。専門家の役割としては、保護者を相互支援の主体者として尊重する姿勢の重要性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：Through the studies of peer-group-support among parents of children with developmental disabilities including Autism Spectrum Disorders, we have made it clear how mutual supports could contribute to empowerment of parents and what kind of roles experts should have in order to facilitate their mutual supports.

It has become clear that talking about their child-rearing experiences with other parents in the same situation brings parents not only sense of security and self-esteem but also some changes in the view of child-rearing as well as of themselves. We have also found that they feel some positive changes have occurred in their relationship with their children. It is suggested that an expert-supporter should focus on active roles of the parents who provide mutual supports.

研究分野：臨床発達心理学

キーワード：発達障害児 育児支援 ピア・グループサポート 相互支援 エンパワメント 当事者主体 対話 共生社会

1. 研究開始当初の背景

発達障害児の育児は保護者の心理的負担が大きく、支援の必要性が指摘されてきた。専門家による早期支援に加え、保護者によるピア・サポートが支援の課題となっている。

平成 15 年より K 市児童館が主催する「育児教室」(事業開始は平成 14 年 4 月。子育てに困難を抱える親子の発達を支援するための親子教室。子どもは発達障害かその疑いと診断あり。月 1 回の頻度で開催)に参加し支援してきた。さらに平成 22 年、「育児教室」参加者による自主サークル(学齢期の発達障害児と保護者の会。地域での交流と相互支援を目的として、月 1 回の保護者ミーティングや季節毎の親子行事を実施)の立ち上げを支援した。共生の地域社会の実現には当事者の主体的参加が欠かせない。こうした経緯をふまえ、発達障害児の地域育児支援における保護者主体のピア・グループサポートの意義と専門家の支援の役割を検討するに至った。

2. 研究の目的

本研究では、育てにくい子どもと発達障害児の地域育児支援(保護者によるピア・グループサポート)の実践経過を踏まえ、参加者へのインタビュー調査の分析を通して、保護者が主体者として成長していく上でピア・グループサポートが果たす役割とそれを支える専門家のあり方について、以下の諸点を明確にすることを目的とした。

(1) ピア・グループサポートの果たす役割

保護者の子ども理解、自己理解、情緒的安定(安心感・自信)、対人関係力、地域での主体者としての成長などについてピア・グループサポートの果たす役割を検討する。

(2) ピア・グループサポートを支援する専門家のあり方

専門性を生かしたグループ・ファシリテート、保護者の主体性の尊重、反省的实践者としての機能、支援の基礎となる人間観・教育観などについて、ピア・グループサポートを支援する専門家が果たす役割を検討する。

3. 研究の方法

(1) ピア・グループサポート実践について

「育児教室」について

運営主体：K 市

目的：育児の学び合い、情報交換

開催場所：市児童館

参加対象者：おおむね 1 歳～6 歳の発達障害児とその保護者。学齢期の子ども保護者参加もあり。1 回の参加者は、おおむね 5～15 組程度。自由参加。現在の来所経路は、保護者同士の口コミと児童館来館者からの参加が主である。

教室の開催方法：年間 8～9 回(およそ月 1 回、午前 10 時～11 時 30 分)開催。

現在のプログラム：9:50～受付/10:00～11:30 親グループ学習会(ピア・グループサポート)/11:30～反省会(スタッフとボランティアスタッフで各参加者の課題を振り返る)支援スタッフ：保育士(市職員)ピア・スタッフ(保護者のボランティアスタッフ)託児ボランティア、研究者(筆者ら臨床心理士・臨床発達心理士のボランティア)各 1～2 名。

「自主サークル」について

運営主体：概ね学齢期の発達障害(グレーゾーンを含む)のある子どもの保護者

目的：交流と相互支援

サークルメンバー：K 市「育児教室」の参加者・元参加者、口コミによる自由参加者。約 20 名(代表 1 名：輪番制、グループリーダー 3 名：メンバーへの連絡責任者)

活動場所：市の児童館ほか

開催方法と主な活動内容：

・『母の会』：月 1 回、午前 10 時～12 時、自由参加、会費なし。保護者と筆者ら研究者(臨床心理士・臨床発達心理士のボランティアスタッフ。ボランティア参加は随時)がラウンドテーブルで、子育ての悩みや工夫・子どもの成長など、育児について近況報告、話し合い・学び合い、情報交換、親子活動の企画打ち合わせなどする。

・『親子活動』：季節ごと、自由参加。遠足・卓球・ボウリング・トランポリン・料理教室・理科教室など。会費は実費。

(2) インタビュー調査

対象者：K 市児童館が主催する「育児教室」の参加者の内、「育児教室」のメンバーにより立ち上げられた「自主サークル」のメンバーでもある学齢期の子ども保護者(母親) 6 名。

調査内容：ピア・グループサポート実践に関する意識を問う半構造化されたインタビュー項目

調査項目： . 支援グループへの意識(グループの意義、情緒的にかかわり、自己の位置・役割) . 他の参加者とのかかわり(情緒面・行動面でのかかわり) . 他の育児グループとの差異、 . 他の支援との差異、 . グループの支援者への意識、 . 自己への気づき、 . 子ども・家族の変化、 . 自分とグループの場・人・関係のイメージ(イメージ画で表現)の 8 項目である。

実施方法：1 対 1 の対面法。インタビューの様子を録画・録音し、筆記記録した。豊富

な語りを引き出すために、被験者の自然な想起や内面の表明を尊重し、一方的・機械的な応答に終始しないよう配慮した。

実施時間：一人当たり3時間～4時間。（途中休憩含む）

4. 研究成果

(1) 被調査者(6名)について

ピア・グループサポート参加歴：2年目(1名)、4年目(1名)、7年目(2名)、8年目(1名)、10年目(1名)

ピア・グループサポート参加開始時の子どもの年齢：3歳(4名)、5歳(1名)、小1(1名)

被調査者の子どもの属性：主に自閉症スペクトラム等の発達障害かその疑いと診断あり。

(2) 調査内容の結果

研究の方法に示したインタビュー調査項目内容うち、i～viiの調査項目への回答結果をまとめたところ以下のものであった。

ピア・グループサポートの意義について

- ・他の人に話をする事によって、ストレスがなくなる。
- ・気持ちが楽になる。
- ・困ったこと、嫌なことがあった時に、話したり相談できたり、共感してくれる人がいて安心できる。大変なのは自分だけではないと感じる。
- ・子どもの将来についてオープンに話せる。
- ・他の子の同様な問題の変化を聞き、自分の子どもの良い方向への変化を想像できる。
- ・人生の先輩に会いにしているような感覚。
- ・他の母の経験や話を聞くことにより、手だてが見える。
- ・子どもの成長について、分からないことを予測できる形で教えてもらえる。先のことが分かる。
- ・育児の工夫について具体的なアドバイスをもらい試してみられる。
- ・頑張らなくちゃという気負いがあったのが、他の母の話を聞いて、気負いが取れた。
- ・自分が話をする事によって、元気になる母がいたら嬉しい。
- ・正解かどうか分からないが、アドバイスができる喜びがある。
- ・未就学の子どもとの親の相談にのる。
- ・園や学校との自分の経験を話して参考にしてみよう。
- ・教室が終わってからの「無駄話」が良い
- ・会が終わった後のランチなど、参加者との

繋がりがあがる。

- ・子どもが同じ特徴を持っているというだけで、プライベートは知らないのに、初対面でも深い話しができるのは凄い。久しぶりでも会えば色々話せる。折角出会えた不思議な関係の出会いを大切にしたい。

- ・参加者とは、子どもの発達や成長について共通点が多く、たまに会うだけでも気楽に安心して話せるなどである。

全体に、ピア・グループサポート参加者の共通認識として、育児の悩みや工夫についての経験談や助言など、同じ立場の仲間話を聞けることや悩みを話せることに意義を見出していることが明らかになった。それと共に、仲間によって支えられた経験が、新たな仲間へのサポート的な働きかけや、仲間同士の主体的な相互支援活動に発展している様子が認められた。

自己および家族への気づきについて

- ・一人ではないという意識になった。
- ・情緒が安定した。おおらかになった。
- ・前向きにものを捉えられるようになった。
- ・子育てへの気負いがなくなった。
- ・他者の話を聞くことで自分の子どもの成長に気づくようになった。
- ・子どもに対して諦めたり、「それがこの子だ」とありのままの子どもを受容し、理解したりするようになった。
- ・「あまり構い過ぎず、もっと子どもに任せて良い」と子どもの意志を尊重した子育てが大切だという意識を持つようになった。
- ・グループでのアドバイスを夫に話して、一緒に対応を考えるようになった。
- ・応援してくれる家族への感謝の気持ちを持つようになった。

同じ立場の他者に話を聞いてもらったりコメントを受けたりすることによってだけでなく、同様の立場の他者の話を聴いたりコメントしたりすることを通して、参加者は、自己の価値観・教育観・人として親としてのあり方の変化を感じ、自分や子ども・子どもとの関係について洞察を深めている様子が伺えた。

また、育児に協力する姿勢や子どもとの関わり方など、配偶者の変化を肯定的に捉えており、ピア・グループサポートを通じて、母親たちが子どもの発達や成長を喜び、親子関係や家族関係の変化を肯定的に捉えていく過程の一端が明らかになった。

他の育児グループや支援との差異について他に関わりのあった育児グループや支援の内容(表1)と特徴・機能(表2)を下記に示す。

表1 その他の育児グループおよび支援とその内容

支援の場	対象	内容
母子通園施設	親子	設定場面での療育
デイサービス	子 (親も)	設定場面での療育(講義、相談会など)
病院/クリニック	子 (親も)	診察、投薬(相談、カウンセリング)
訓練	子	言語療法、作業療法、音楽療法
育児サークル	親子	子ども同士の触れ合い、親同士の話し合い
教育、児相センター	子	発達、知能テスト、手帳の判定
活動サークル	親子	料理、工作など
塾	子	公文、スイミングなど
親の会	親子	SST、相談会
大学の相談室	親子	大人との遊び(1対1)、親の相談(1対1)

表2 その他の育児グループおよび支援の機能

支援の場	場の特徴・機能
母子通園施設/デイサービス/育児サークル/活動サークル/親の会	親同士の話し合い、支え合いの場や機会がある
病院/クリニック/訓練/教育・児相センター/塾/大学の相談室	1対1(子どもと大人、親と専門家)の関係性

その他の育児グループや支援の場との対比で、ピア・グループサポートについては下記のような回答が得られた。

- ・同じ立場の人の話を聞くことができる
- ・育児の悩み、自分の悩みを聞いてくれる
- ・気持ちが楽になる
- ・子どもの成長を感じる
- ・続けていきたい
- ・自分の経験をもとに、助言する「ちょっと先輩」の立場
- ・活動を自分たちで決める。
- ・運営・企画等の作業を分担して皆でやる。

参加者の発言から、メンバーはピア・グループサポートに、他の育児グループや支援に見出されると同様の親同士の話し合い・支え合いの場としての意義を見出しているだけでなく、主体者として機能できる自己を発見し、そこに意義を感じている様子が伺えた。

グループの支援者への意識について

支援者の認識に関する回答をまとめると以下のようなものである。

- ・参加者にとって、支援者は、悩みを相談す

る相手であり、気持ちを受け止めてくれる存在だったが、次第に、話し合いの場を提供し参加者を客観的に見守る存在へと変化した。

・支援者は、母親を理解し、自らの経験を語る「他の母親に近い」存在として認識されている。

・会の進行役、調整・まとめ役。

・参加者の中に、他の母親の話を聞く支援者としての意識が芽生えている。

・後に続く他の母親たちのために、育児教室の継続及び発展を望んでいる。

・参加者の声を市の教育や福祉の取り組みに生かして欲しいと思っている。

以上のように、ピア・グループサポートにおいて、恐らく最初は支援スタッフからの発言への促しや励まし、あるいは支援スタッフの存在への認識の変化を通して、参加者の母親たちが支援を受ける立場から、主体的に相互支援に関わっていく過程の一端が明らかになった。また支援者は具体的な育児のアドバイスを与える人というより、対等な立場で対話する一経験者として捉えられており、客観的で広い視野を持ち、ピア・グループサポートの機会を提供し、参加者の声を公に届けてくれる可能性のある人として期待されていることがうかがわれた。

まとめと今後の課題

本研究結果より、ピア・グループサポートがメンバーに安心感や自己信頼感をもたらすだけでなく、相互支援の主体者としての意識の高まりに貢献することが示唆された。またグループを支援する専門家の役割としては、相互支援の主体者として保護者を尊重する姿勢の重要性が示唆された。

今後は、引き続きピア・グループサポートの実践にかかわり、発達障害児の思春期の子育ての課題と支援のニーズを明らかにすること、地域生活に根ざす持続的ピア・グループサポートが学童期から思春期の子どもと保護者の成長にどう貢献するかを明らかにすることが課題となると思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 5件)

幸 順子・竹澤大史, 育てにくい子どもと発達障害児の地域における育児支援-ピア・グループサポート参加者へのインタビュー調査から 1-. 日本発達心理学会第 25 回大会(京都) 発表論文集, 670, 2014

竹澤大史・幸 順子, 育てにくい子どもと発達障害児の地域における育児支援-ピア・グループサポート参加者へのインタビュー調査から 2-. 日本発達心理学会第 25 回大会(京都) 発表論文集, 671, 2014

竹澤大史・幸 順子, 育てにくい子どもと発達障害児の地域における育児支援-ピア・グループサポート参加者へのインタビュー調査から 3-. 日本発達心理学会第 26 回大会(東京) 発表論文集, P5031, 2015

幸 順子・竹澤大史, 育てにくい子どもと発達障害児の地域における育児支援-ピア・グループサポート参加者へのインタビュー調査から 4-. 日本発達心理学会第 26 回大会(東京) 発表論文集, P5032, 2015

竹澤大史・幸 順子, 育てにくい子どもと発達障害児の地域における育児支援-ピア・グループサポート参加者へのインタビュー調査から 5-. 日本発達心理学会第 27 回大会(札幌) 発表論文集, PD-78, 2016

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

幸 順子 (YUKI, Junko)

名古屋女子大学短期大学部・保育学科・講師

研究者番号: 20250251

(2) 研究分担者

竹澤 大史 (TAKEZAWA, Taishi)

愛知県心身障害者コロニー発達障害研究所・教育福祉学部・主任研究員

研究者番号: 80393130

(3) 連携研究者

浅野 敬子 (ASANO, Keiko)

至学館大学健康科学部・子ども健康・教育学科・教授

研究者番号: 40097655